

タイトル 嵐の中の救命登山（1）

山岳診療班での最大の思い出を二回にわたってお話しします。立山連峰の雄は、その名の通り雄山（おやま；と読みます）。雄山での忘れられない思い出です。以下、文章を断定調にしますことをお許してください。

毎晩の診療小屋は宴会！と書いたが、残留山岳部では「飲まない順番」つまり担当日があって、緊急呼び出しに備える役があった。山岳部本隊は山奥に入っている。Dr.本多も「学4」つまり6年生になると偉そうに毎日、日替わり所長を交代する役がまわってきた。

まだ医師免許はないから、OBがいない日は、医療支援（アドバイス）の形で出動した（実際たいていの外傷対応はできたのだが）、日替わり所長は演じるのが楽しかった。

さてさて、8月も半ば過ぎると山の天候は大荒れとなった。当時は山の晴天は7月末1週間は続く！という常識があったが、2019年のこの数年はまったく予想不能になってしまった。いまは山の計画は難しい。高齢登山者の7月末の遭難を聞いては、穏やかだった昔を思い出す。

8月も半ばすぎたある夜、暴風と叩きつける雨はするどくガラス窓を殴り続けた。こんな夜はさすがに緊急呼び出しもないだろうと、皆きを緩めながらも、逆に酒もあまり進まなかった。

当日、僕は日替わりの所長役で、飲酒を控えていた。

今夜はさすがにもう電話ないから飲めよとはいわれながらも、なんとなく進まなかった。

すると、！！夜8時を回った、嵐たけなわの頃、はしご階段の電話が叫ぶように鳴りだした。今は懐かしい「リリリーン」である。

ただ事の電話じゃなさそうだ、はしごを駆け降りた後輩山岳部が、はい、はいと返事している。

そして大きな声で階上に向かって

「雄山（おやま）神社巫女さん、発熱う、往診の依頼いでーす」

あの雄山（おやま）山頂には神社があり、毎年富山の女子高生が巫女のアルバイトに来る。

実は前年、発熱から肺炎を悪化させ（気圧が低いので酸素分圧も低いからだろう）ひとり悲しいことに亡くなる事件が起きていた。

雄山神社＋巫女さん＋発熱 と来れば、神社もこちら診療所も去年を思い出す。

神社側は、どんな大嵐でも往診してほしい！ その対応こそが問われるからだ。去年の今年だ。

よくわかる。

電話の後輩は続ける「途中の一の越山荘で、強力（ごーりき）さんが待機してまーすう」

さて、地獄谷診療所の海拔は2400m、雄山山頂は3000mを超える。真夜中、真っ暗闇の中、大嵐・暴風雨の中を、一気に600m登山するわけだから、一般的には自殺行為だが、「一の越山荘に強力（ごうりき）さんが待機！」ということは、もう

立山連峰全体を挙げての大イベントになっているわけだ。レッドカーペットが敷かれているのに、歩かないわけにはいかない俺たちだった。

メンバーは、その日所長の俺、同学年のBをサブとする、電話を取ったしらふの山岳部C、この三人と決まった。この場合Cの存在は非常に力強い。なにせ山岳部なのである。ひとりで酸素ボンベから救急医療用セット、診療器具、そして患者は内科用だが、なにせ立山だ、万一仲間が怪我・転落・落石に遭えば、外科用具も必要だ。それらをひとりでかついでくれる！すごい力だ。しかもライトを照らして、最後を歩いてくれる。

はっきり言って俺たち「学4」は小屋でこそ偉そうだが、山はずぶの素人といっている。歩き方は後輩に従うしかない。こういうとき山岳部のアドバイスはありがたい。診療所残留隊の、応援の雄たけびも、嵐の中にすぐに消えた。はじめ緩やかな道は想像以上に真っ暗だった。

防寒も必要かと思ったが、ポンチョの下で速足で歩く胸元は暑くて暑くて汗にまみれた。が、止まると恐ろしく寒かった！

どれくらい登っているのか？ どこまできているのか？

闇の中でなにもわからない。隣の奴の声も聞こえない。

ときおり、手を握り合い励まし合う！

山岳部が前に来ては、ガッツポーズを見せる！がんばれ先輩！という意味だろう！

1センチもありそうな雨粒が、横殴りに頬を殴ってゆく！しかし、人命救助の夜間行である、のんびりは登ってられない、速い、速い、息も胸も苦しい！一瞬気を失いそうになる。足元が危ない！

もう息絶え絶えの頃、全行程の三分の1ほどのところの一の越山荘に到着した！

ここが終わりではない、ここからが本格登山である。

その勾配の凄さはよく知っている。

一の越山荘では光をこうこうと付けて我々の到着を待っていてくれた。緑茶がいっぱいずつ振る舞われた。立山連峰が一致協力してやっていることがよくわかった。

5人の大きな体躯の男たちが、登山支度を整え、最敬礼で迎えてくれた。敬礼というものは、一方的にされてみると、任された責任をひしひしとを感じるものである。

年齢は一回り以上上のひとたちのようだったが、ひとりひとりタオルを持って優しく俺たちの顔を拭いてくれた。すごい太い腕だった。

さあ、第二ラウンドが待っている！
待ってるよ！少女！助けに行くぞ！

つ・づ・く